連載Ⅰ
あの町この町
第50回

環境資源——鳥取県智頭町

ドイツ文学者・エッセイスト
池内紀
（イラスト＝著者）

智頭町のある鳥取県東南部を八頭郡といって、現在は八頭町、若桜町、智頭町の三町のみだが、「平成の大合併」までは八町村を数えた。八つの「頭」から成るので「八頭」なのか。しかし明治半ばまでは八東郡、八上郡、智頭郡であったものを、明治二十九年（一八九六）の合併で八頭郡ができたというから、八町村説はあたらない。それにしても郡名に「八」がつくのが多いのはどうしてだろう？

町域の九三％が山林で、人口約八千人。林業の町として知られてきた。中心部は鳥取と畿内を結ぶ智頭街道の宿場町として発展した。吉野と並ぶ杉の産地だったが、山林が見捨てられて久しいのだ。またクルマ社会にあって旧の宿場町は、ただ車と人が通り過ぎるだけ——。

いや、ちがう。鳥取県智頭町は、もっともいいかたちで町づくりに成功した一つだろう。国の政策が集約と効率第一、周辺部切り捨てのなかで、智頭町は大につくことを求めず自立を選んだ。林業はふるわなくとも山林の町は凋落しなかったし、むしろ新しい可能性をひめている。旧宿場はものさびしい廃市とはならず、いれかわりたちかわり人がやってくる。そして町おこしは中心部にかぎらず、山あいの小さな町全域に及んでいる。

もし「観光スポット」を数えるなら、いたって貧しい。目ぼしい見ものは石谷家といって国登録重要文化財になっている元大庄屋の建物ぐらいで、神社仏閣に国宝クラスの何があるわけではない。「歴史の道百選」に選ばれた智頭往来にしても、全国百カ所ある一つにすぎず、それも旧宿内はほんの一キロたらず。千代川沿いの桜土手はソメイヨシノが計一八〇本。この程度の名所なら日本中のあちこちにあるだろう。「西河克己映画記念館」があるが、小さな洋館に撮影現場のスナップ写真やポスターを並べただけで、そもそも当地出身といっても映画監督西河克己は、四歳のときに家族とともに町を離れ、里帰りしたのは七十年ちかくたってからのこと。実質的には記念すべき何もない。

にもかかわらず智頭町はとてもいい町である。歩いていると幸せな気分がして、わざと歩調を落としたくなり、何てことのない一角で立ちどまって、何てことのない風景をしみじみ味わいたくなる。いったい、どうしてこんなぐあいになるのだろう？

石谷家は屋号を「塩屋」といって、古くは鳥取城下で塩の卸問屋をしていた。元禄年間に智頭に移り、宿場問屋と地主経営に乗り出した。明敏な当主がいたにちがいない。五代将軍綱吉の治世下であって、幕藩体制が

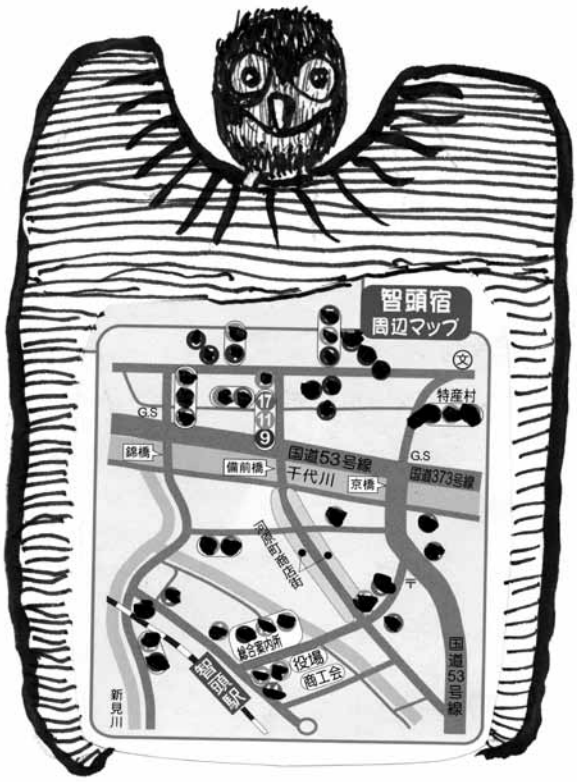
かたまり、農業生産が大きく向上、商品経済が飛躍的に発展して、各地に大商人が台頭してきたころである。藩の監視の強いお城下よりも宿場町のほうが自由がきくし、人の往きかう街道町には、さまざまな情報がもたらされる。本家石谷には襲名が伝三郎、伝九郎、伝四郎の三つあって、三代で一巡する方式をとっていた。ふつう家名は一つなのに、どうして三つもあったのか。家の習わしや伝統にこだわらず、代ごとに別式でやれという戒めをこめたものか。

明和九年（一七七二）、伝三郎が大庄屋に任じられた。藩の政務代行である。裕福で人望がないとつとまらない。つづいて伝九郎が就任。だが、きっちり五十年つとめて文政五年（一八二二）以降は辞退し、分家や他家に譲っている。これも正確に時代を見てのことだろう。幕藩体制がキシみだし、農民一揆があちこちで起きはじめていた。農民がまっ先に不満をぶつけるのは代行役の大庄屋であって、お役をつとめてロクなことはないのである。

明治以後は山林経営と銀行業、そして政治家として活躍。鉄道の時代になって街道がさびれると、私財を投じて因美線（大正十二年開通）を実現した。重要文化財の石谷家住宅は、この前後に十年がかりで改築したというが、旧家がもっとも栄華を誇ったころの産物であって、敷地三千坪、部屋数は四十にあまり、土蔵七棟。まずは主屋の土間に圧倒される。吹き抜け式で、松の巨木を用いた梁組の豪壮なこととときたら、超高層ビルにも匹敵するのだ。上がったところの大きな囲炉裏ばたが家人と出入りの人とのサロンになった。

書院座敷の応接間、国登録名勝地の庭園に面した江戸座敷、主人の間、大きな神棚を祀る神殿室、モダンな螺旋階段と吹き抜け空間に架した太鼓橋。十年に及ぶ大工事の間、名のある棟梁がここぞとばかりに腕を振るったのではなかろうか。

襲名を三つ用意しても旧家を持ちこたえ



智頭町パンフレットより

るのは並み大抵のことでない。ましてや戦中戦後の厳しい時代に大々的な農地解放があり、代がかわると相続税が待っていた。腕章をつけた説明役の人にそっとたずねると、現当主は東京住まいで、邸宅は町に寄贈され、現在は因幡街道ふるさと振興財団が運営している。

「これだけ大きいとねェ」

家を継ぐことの難しさは、土地の人が一番よく知っている。

「智頭宿周辺マップ」には、石谷家住宅のすぐ前に「御本陣跡」、その左どなりに米原邸、右どなりに伊藤邸とある。まん中に国登録有形文化財の消防屯所。どうして消防団の詰め所が文化財になったりするのか？　木造洋風のつくりが独特で、めったにないしろものなのだ。背後に牛臥山（うしふせやま）を控え、旧智頭の屋敷街にあって、さしずめ山の手消防隊のおもむきがあったと思われる。

ほかにも昭和初期にはやったアール・デコ調の家や、造り酒屋の重厚な蔵、消防屯所と同じく有形文化財の公民館、古い道しるべ……。

鳥取市と結ぶ幹線国道53号は、旧宿が一望できる関屋番所跡で街道とわかれ、千代川沿いにのびている。車の大半はそちらなので、警笛や信号に気をとられることなく、のんびりと町歩きができる。観光バスできた団体が、旗をもった人を先頭にゾロゾロと歩いていく。何やら参勤交代の大名行列に似ているのは、観光客こそ現代の大名であるからで、キラびやかにやってきて、気前よくお土産を買っていく。

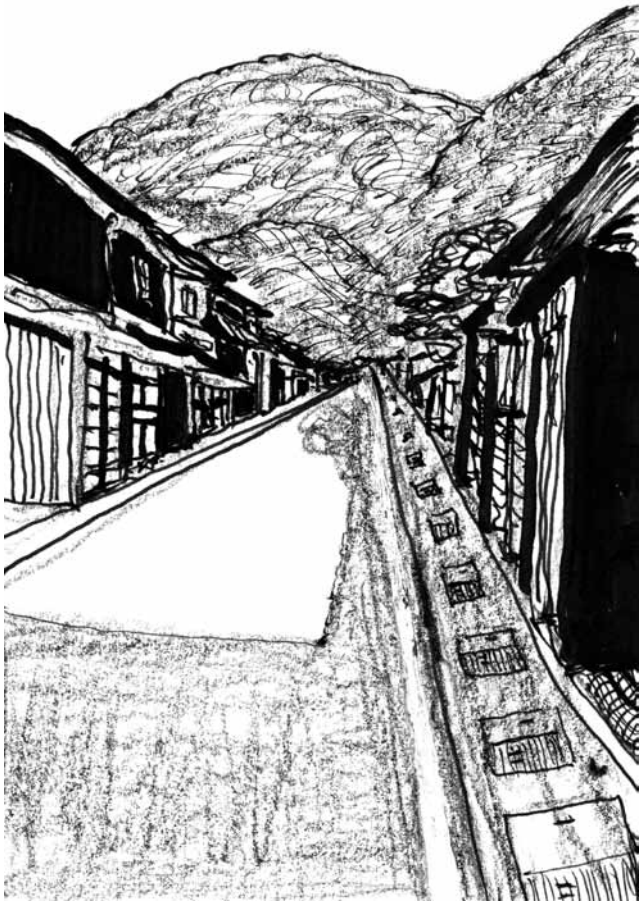
三叉路の道標が因幡街道と備前街道の分岐点を告げている。T字型のタテにあたるのが河原町商店街で、さびれぎみながら、わびしい感じはしない。時代の変化はとっくに承知ずみといったふうで、酒店、薬局、食品店などのほかは店を閉じていても、昔ながらの格子や桟が美しく、店先に「川舟」と呼ばれる木づくりの水槽があって、澄んだ水が流れ落ちている。静まり返った昼下がりに、サラサラと水音が聞こえるようだ。

板井原（いたいばら）集落は町から車で山道を走ること十五分ばかり。牛臥山の一つ山向こうの谷あいに、突如として家並みがあらわれる。渓

消防屯所

流と山裾のあいだにひしめき合って、現在は二十数戸だが、かつては四十にあまったそうだ。昭和三十年代そのままで、高度成長に入る以前の山村集落をよくとどめており、県の伝統的建造物群保存地区に指定されている。

木炭がエネルギー源で、山林が大きな産業だったころ、わざわざ町から通うよりも山中に住んだほうが効率的である。清流が走り、陽だまりで畑ができる。公民館、学校の分校、神社などがつくられた。時代がかわり、大半の人が出ていってからも町は集落を捨てなかった。自分たちの暮らしと文化を伝える大切な「生き証人」であるからだ。



備前街道の商店街

智頭町は行政関係者には、「ひまわりシステム発祥の地」として知られている。郵便局の外務職員が郵便物を届ける際、ひとり暮らしの高齢者の用事を聞いてサポートするというもの。ヒマワリの花と「日回り」を掛けた命名だろう。今では全国の市町村にひろまっているが、智頭町役場福祉課の発案だった。つづいて企画課が「日本1／0村おこし運動」を呼びかけ、これも評判になった。各集落が0から1へ一歩踏み出して、みずから地域の特色を掘り起こそうというのだ。「一村一品」に似ているが、物品の生産にかぎらなくてもいい。集落ごとに地区振興協議会がつくられ、0から1への運動がはじまった。

「みどりの風が吹く〝疎開〟のまち」

カラー八頁のパンフレットが小さな写真カットで「智頭遺産」を収めている。地区の人々があらためて自分たちの住む環境を見直し、町の資源として誇らかに提出した。板井原の杉木立、真鹿野の山麓風景、波多の台のススキ草原、毛谷の古民家、篠坂の切り通し岩……。写真提供者の名前が掲げてある。上田勝利さん、小林悦次さん、玉木将雄さん……。お名前からして世代とおトシがほぼわかる。

四方を千メートル前後の山に囲まれ、おお

かたの集落は山裾にある。それぞれの地形に応じて家を建て、植林し、農地を開いた。近年は「里山」といった言い方をされるが、人と自然が共生するなかで特有の景観が形成されてきた。それを「環境資源」と名づけて、どうしていけないことがあろう。豊乗寺の大杉とマキ、北股川の河畔樹、ミズナラ、那岐神社の社叢、道ばたの柿の大木。農地や集落近くにあって、ランドマークの役目を果たしてきた。そんな古木や杜が、いわば「原日本的風景」を生み出している。山、川、集落、里。名もないスポットながら、日本人なら誰もが懐かしく思い、いいしれぬ郷愁を覚える景観である。それを自分たちの環境資源として誇っていけないわけがあろうか。

智頭街道は町を出ると一路南下する。観音堂のある中原、副ケ滝、ついで駒帰。昔は最奥の宿場村で、ここで馬を帰したのだろう。志戸坂峠までの念仏岩、泣き地蔵が、かつての旅の厳しさをしのばせる。今ではトンネルまで車で走り上がるが、おりおりハッとするような景色があらわれるのだ。石垣を築いて家をつくった。古民家に特有のやさしさと確固とした造形美が目の底にやきついてくる。それはまわりの梅の木や柿林と、さらに背後の杉林ともあざやかに調和しており、長い歳月のなかではぐくまれてきたものだ。日本人が「ふるさと」というとき、きっと思い起こす記憶の原型にひとしい。「智頭町全域マップ」には、「奥西のお茶とヤーコン栽培」「五月田の栃ようかん、地蔵餅」「市瀬の花づくり」「中島の伝承館」などと、それぞれの集落に村おこし運動の成果が添えてある。

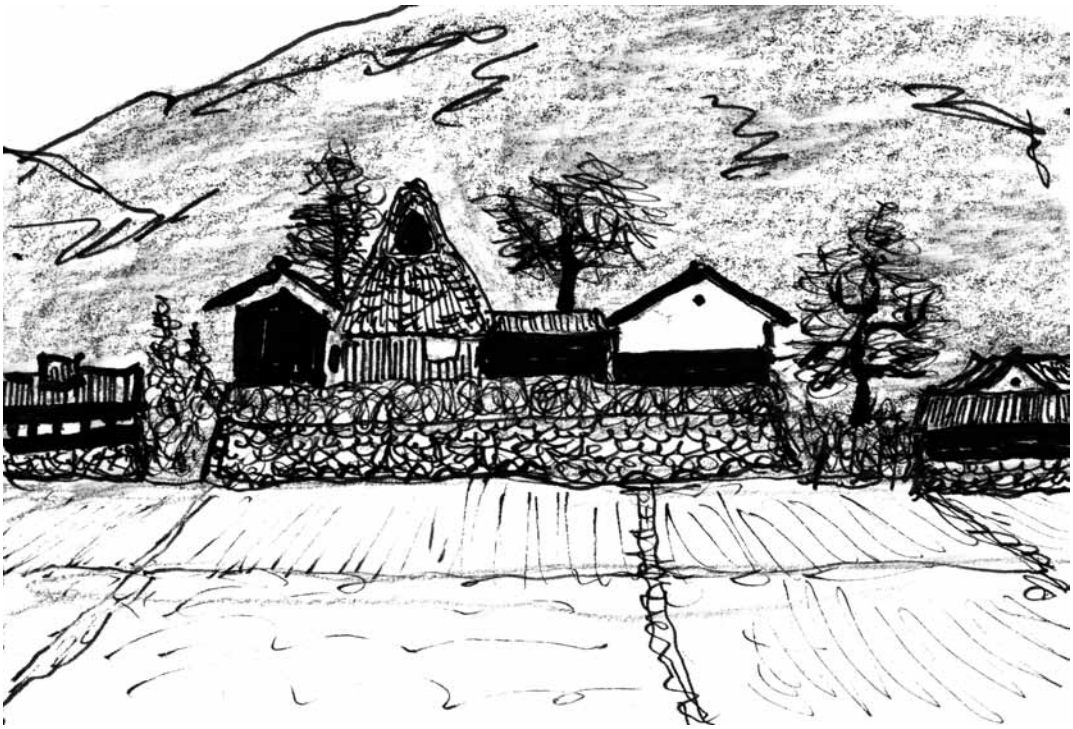
「私らの集落はたった十三軒しかないじゃが」

五月田農産加工所の案内によると、小さな山里は標高一二五五メートルの那岐山の麓にあって寒暖の差が大きい、米づくりには絶好の気候で「鈴原糯」というもち米ができる。これでつくったしろ餅はきめがこまかく、なめらかで、米の甘味が独特だそうだ。黒豆を入れて塩味をきかしたのが豆もち。よもぎ、カボチャ、紫いもなどの味をつめたかきもち、数秒でトローンととけるシャブシャブ餅、ほかにもとち餅や土地の名そのままの春五月のよもぎ餅。あるいは十三軒メンバーの若手が考案したらしいマロニエ(栃)シフォンケーキ。

カラーのチラシは、現場からの原稿と写真を町が1／0運動の予算で刷り物にしたのだろう。智頭駅前の観光協会にいろいろと取り揃えてある。情報センターであるとともに物産館でもあって、地産のサンプルがところ狭しと並べてある。

観光協会のとなりがスーパー、向かいが町役場、農協、消防署、商工会、総合センター、バス停。広場もそなわっていて、駅をバックに催しや集会ができる。線路の向こうに町営マンションと保健・医療・福祉の総合センター、一階のホールは講演会やイベントの会場になる。駅前という便利なところに、暮らしに必要な施設がほぼすべてそなわっている。一カ所で用がたせて、買い物をして帰れる。大合併のあと、やたらに立派な庁舎を不便なところに押したてたケースが多かったなかで、智頭町の町づくりには凛とした一本の筋が通っている。

自分たちの環境資源を再発見してリストにしたのも、はっきりした考えあってのことなのだ。先祖から受け継いだ環境遺産を新しい視点で見直して、今の時代にあらためて意味を問い直す。さもないと市街地の拡大や公共工事であっというまに消え失せるし、「大規模開発」の名のもとに一挙に根だやしにされた例がいくらもある。人の暮らしがあってこその資源であり、生活様式の変化のなかで、みるまに荒廃するだろう。少子高齢化はとどめ難いのだ。廃村のけはいはじりじりと迫っている。1／0運動が、そんな危機感から生まれたことはあきらかだ。キャッチフレー



郊外の風景

ズにある「〝疎開〟のまち」は、戦争末期に国策として実施された疎開ではもとよりなく、過疎を迫られている土地を開くといった意味ではなかろうか。それとも灰色の空の下で暮らす都会人に、みどりの風の町への21世紀的疎開のすすめでもあるのだろうか。

そのうち気がついたが、町には板井原、中原、木原、福原、河津原、米原、郷原、野原、坂原など、「原」のつく集落名がめだって多いのだ。前につく文字によって「ハラ」「バラ」「ワラ」と言いかえる。山あいにあって一定の平地を指す言葉なのだろう。とたんに「八」のつく郡名の秘密がわかったような気がした。八百屋（やおや）、八十路（やそじ）、七重八重（ななえやえ）、八百八橋の使い方からもわかるとおり、八は数量ではなく数が多いことをあらわしており、八東郡、八上郡、八頭郡はいずれも多数の集落をもつことの郡名ではあるまいか。

では八頭に対する智頭はどうなのだ？わが文字解によると、「千世（ちよ）に八千世（やちよ）に」の「千」は、これもまたとびきり多くの数を含んでいる。その千を智にとりかえた。その町づくりからすると、町名に智をもつのはダテではないのである。

（いけうち　おさむ）